

令和 4 年 6 月 17 日現在

機関番号：33921

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2019～2021

課題番号：19K23304

研究課題名（和文）ネパール基礎教育における公立・私立校格差 - エビデンスベースで見る教授・学習活動

研究課題名（英文）Educational disparity between public and private schools in basic education in Nepal: Teaching-learning activities based on the evidence

研究代表者

江崎 那留穂 (Ezaki, Naruho)

愛知淑徳大学・交流文化学部・講師

研究者番号：10844459

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究はネパールを対象に、教育の質を左右する学校内プロセスに着目し、私立校等の高いパフォーマンスを支える要因を解明することを目的とする。「量」と「質」の側面および教育の質を下支えする教員の背景や資格について分析した結果、全国統一試験の合格率が高い学校は、低い学校と比較して学習者の学習量が圧倒的に多く、教員による学習状況の把握も徹底的になされていた。他方、質については、私語などの学習外活動のみ差異が見られ、それを下支えする教員資格の有無や最終学歴は学校内プロセスに大きな影響を及ぼしていないことが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ネパールを含む多くの開発途上国において「質の高い教育」を求める動きが発生する中、公立校における教育の質的改善が喫緊の課題となっている。しかしながら、開発途上国では様々なリスクと不便を伴うことから、教育の質を左右し、学習者の学力に直接的な影響を及ぼす要因である学校内プロセスに関する研究は乏しい。そのような中、本研究は教室の中まで踏み込み、そこでの学習活動に関する情報や学習者のノート等を一つのエビデンスとして丹念に収集・分析し、ブラックボックス化している開発途上国の学校内プロセスに光を当てることができた。

研究成果の概要（英文）：This study examined the factors that contribute to high academic achievement through a detailed analysis of the teaching-learning process in Nepal. The study analysed several aspects of 'quantity' and 'quality'. Teacher background and qualification, which support quality of education, were also analysed. The result showed that the school with a high passing rate in the national standardised examination produced an extremely large amount of learning compared with that with a low passing rate. Moreover, the teacher from the school with a high passing rate thoroughly grasped the learning situation. Meanwhile, for quality aspects, a clear difference was observed only in non-learning activities, such as whispering with classmates. Furthermore, the finding implied that teacher qualification and final academic background did not have a great influence on the teaching-learning process.

研究分野：教育開発

キーワード：教育格差 教育の質 教授学習過程 南アジア ネパール

## 1. 研究開始当初の背景

「持続可能な開発目標 (Sustainable Development Goals: SDGs)」において「教育の質的向上」が教育分野の新たな課題として掲げられ、今や国際社会全体が「教育の質」に注目している。多くの開発途上国における教育現場でも、既に「質の高い教育」を求める動きが発生しており、子どもたちの将来を大きく左右する全国統一試験等において高いパフォーマンスを示す私立校の在籍者数が急増している。他方、公立校では、学年末評価と一致しない修学のパターンや度重なる留年や一時退学を含むパターン等、常識的にはあり得ない驚くべき修学実態が明らかとなっており (關谷 2018; Ezaki 2019) 教育の質の低さが指摘されている。

教育を介した格差拡大が懸念される中、開発途上国で今問題にすべきは、このように全国統一試験等において高いパフォーマンスを実現できる学校とそうではない学校では何がどのように異なるのかを解明することである。一国の大多数を占める公立校においても「質の高い教育」を提供できるようにするためには如何なる方策や政策が必要なのか、それらをエビデンスベースで政策提言に結びつけることは喫緊の課題である。

どのような要因が学習者のパフォーマンス (本研究では全国統一試験等の結果を指す) を高めるかについては、先進国では多くの研究がなされてきた。学校インプットが学習者のアウトプットに与える効果を定量的に分析するという点で 1960 年代の教育生産関数分析が源流である。1990 年代には学校インプットに限らず、学校内のプロセスも含めて分析されるようになり (Teddlie & Reynolds 2000) それ以来マルチレベルモデル分析等の定量分析を用いた研究が行われてきた。現在では質的分析の欠如が課題として挙げられ、定性分析を主として行う学校改善研究と合流する動きが見られる (Reynolds et al. 2014)。

他方、データ収集が容易ではない開発途上国では依然として教育生産関数分析が中心であり、学校内のプロセスがブラックボックス化してしまっている。学校内のプロセスにあたる授業や学習量は、「教育の質」形成の中核に位置しており、学習者の学力に直接的な影響を及ぼす要因である。ゆえに、とりわけこれら 2 点に着目して詳細に分析し、高いパフォーマンスを実現している学校とそうではない学校では何がどのように異なるのか、もしくは変わらないのか、を解明することは極めて重要である。

## 2. 研究の目的

本研究は、学校内プロセスに着目して私立校等の高いパフォーマンスを支える要因を明らかにし、高いパフォーマンスを実現できない学校にそれらの要因をどのように応用できるかについて検討することを目的とする。そして、SDG4 の達成に向けて、現在公立校の機能不全という深刻な問題を抱える後発開発途上国への提言を引き出すことを試みる。対象国は、公立・私立校間の教育格差問題を抱えるネパール連邦民主共和国 (以下、ネパール) である。

## 3. 研究の方法

本研究では、学校内プロセスにおける (1)「量」の側面と、(2)「質」の側面を分析する。学校内プロセスにおける「量」とは、授業時間などが最も分かりやすいが、開発途上国では教員による欠勤やストライキ、自然災害等の影響により、カリキュラム通りに授業が行われないことが少なくない。そこで本研究では、学習済み単元数、ノートの使用ページ数、特定の単元における問題数といった学習者の学習量を「量」の側面として捉える。

また、開発途上国における授業の研究では、個々の研究者が各々の観点で実施しており、学習者の観点が不足していることが指摘されている。そのため本研究では、「質」の側面については、能動的課題従事や受動的課題従事といった学習者の学習活動に着目する。そして、その「質」を下支えする教員の背景や資格についても分析する。さらに、学校外要因である学習者の特性や家庭背景等も含め、如何なる要因の影響が最も強いのかを検討する。

対象地域は、近年私立校の設立が急増しているバクタプル郡とする。対象校は、全国統一試験の合格率が異なる、郊外に位置する公立校と私立校、そして街中に位置する私立校の合計 3 校である。対象学年は、授業分析を行う上で学習者の言語能力の発達度合いを考慮し、基礎教育の中間学年にあたる 5 年生とする。授業分析においては、系統性が重要な算数科の授業を対象とする。

## 4. 研究成果

学校内プロセスにおける (1)「量」の側面と、(2)「質」の側面を分析した結果、とりわけ「量」の側面において差異が確認された。全国統一試験の合格率が最も高い街中の私立校では、学習者のノートの使用ページ数や特定の単元における問題数が他の 2 校のそれらよりも圧倒的に多く、教員による学習状況の把握も徹底的になされていた。依然として暗記型の試験が実施されてい

るネパールの教育現場では、いかに「量」をこなすかを重視していることが読み取れる。

「質」の側面については、学習者の学習活動において顕著な差異が見られたのは、能動的課題従事や受動的課題従事ではなく、私語や手遊びといった学習外活動であった。全国統一試験の合格率が最も低い郊外の公立校の対象教員は、他の2校の対象教員よりも経験年数が約6倍長く、教育専攻の学士号を取得しているにもかかわらず、クラスコントロールができておらず、学習者の学習外活動の合計時間が最も長いことが明らかとなった。また、全教員を対象とした教員の特徴分析においても、他の対象校よりも郊外の公立校の方が、教員の背景や資格が良好な状態にあるにもかかわらず、全国統一試験の合格率が低いことが分かった。これより、教員の背景や資格は、学校内プロセスに大きな影響を及ぼしていないことが示唆された。

上記の結果より、学校内プロセスにおいては「ねじれ現象」が生じていると言えよう。この「ねじれ現象」の原因は、大きく二つあると考えられる。第一に、学校効果研究においても重視されている校長のリーダーシップやマネジメントが挙げられる。全国統一試験の合格率が最も高い街中の私立校では、校長による教員の出勤状況の管理や授業の実施状況の把握が徹底されており、教員との情報共有や教員・学習者とのコミュニケーションが円滑に行われていた。他方、全国統一試験の合格率が最も低い郊外の公立校では、教員の欠勤のみならず、校長の欠勤も度々確認されており、校長のリーダーシップの欠如が見られた。第二に、雇用形態に起因する教員の意識が挙げられる。私立校の教員は全員契約であり、パフォーマンスが悪ければ、いつ解雇されてもおかしくない状況にある。そのため、教員は常に緊張感を持って仕事に取り組んでいた。一方、公立校は正規雇用者が半数以上であり、彼らは容易に解雇されることはない。このような背景もあり、公立校では杜撰な学校運営 (Subedi et al., 2013; Joshi, 2014; Ezaki, 2019) が多々指摘されていると考えられる。ゆえに、SDG4 の達成に向けては、教員研修や教材開発よりも、学校マネジメントに注力するべきではないだろうか。

最後に、学校外要因である学習者の特性や家庭背景を含めた総合分析について記す。本分析に用いるデータは、研究二年目の2020年度に、現地調査にて収集する予定であった。しかしながら、新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) の影響により現地調査の実施が叶わず、データを収集することができなかった。そのため補助事業期間の延長を行い、三年目での収集を試みたが、状況は変わらなかった。ゆえに、代替措置として現地の研究協力者の協力を得て遠隔調査を実施した。コロナ禍においては家庭訪問調査等を要する学校外要因の調査を実施することは困難であったため、学校要因に関する追加の情報収集に加え、コロナ禍における授業実施方法や教員の教授活動、学習者の学習活動等についての情報を収集した。その結果、COVID-19 の影響により対象校間における学習量の差が拡大傾向にあることが分かった。今後、さらなる詳細分析を継続し、これらの研究成果についても国内外の学会にて発表し、論文化していく計画である。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Naruho Ezaki	4. 巻 22
2. 論文標題 A study of equality of educational opportunity in Nepal using logistic regression analysis	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 International Journal of Comparative Education and Development	6. 最初と最後の頁 249-262
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1108/IJCED-03-2020-0012	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Naruho Ezaki	4. 巻 23
2. 論文標題 Relation between educational qualifications and occupations/incomes in a globalised world: focusing on Nepalese youth	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 International Journal of Comparative Education and Development	6. 最初と最後の頁 23-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1108/IJCED-12-2020-0088	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 江崎 那留穂	4. 巻 10
2. 論文標題 ネパール基礎教育における教授学習過程の差異に関する考察 - 学校間格差に着目して	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 関西学院大学国際学研究	6. 最初と最後の頁 5-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件/うち国際学会 2件）

1. 発表者名 江崎 那留穂
2. 発表標題 開発途上国の学校教育におけるCOVID-19の影響 - ネパールの事例
3. 学会等名 日本比較教育学会第57回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 江崎 那留穂・關谷 武司
2. 発表標題 教授学習過程に着目した高い学業達成に資する要因の考察 - ネパール初等教育の事例
3. 学会等名 国際開発学会第31回全国大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Naruho Ezaki
2. 発表標題 Differences in the teaching-learning process among schools: A case study on basic education in Nepal
3. 学会等名 Comparative Education Society of Hong Kong 2021 Spring Annual Conference (国際学会)
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 Naruho Ezaki	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Union Press	5. 総ページ数 172
3. 書名 Impact of the 2015 Nepal earthquakes on individual children's enrolment situation: Seeking 'high-quality education'	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------